

小特集：バイオエコノミクス

## サラワク先住民ブナン社会における 疾病、林道封鎖、NGO

奥野克巳

- 1. はじめに
- 2. サラワクの開発とブナン人
- 3. 疾病と近代医療の導入
- 4. 抗議行動としての林道封鎖
- 5. NGOと知的所有権
- 6. おわりに

### 1. はじめに

20世紀前半の植民地主義時代には宗主国が植民地の領土を拡張し、20世紀の後半には旧植民地が独立して国民国家を建設する中で、国家がそこにもとから住んでいた人びとを統治するようになり、人びとの土地を奪い、諸権利を制限するようになった。その結果、国家と先住民の間の社会的な紛争が顕著になったのである。1950年代から60年代のアメリカの公民権運動に触発された北米、南米、オーストラリア、ニュージーランド、北欧などの先住民たちは、1970年代以降になると先住民の権利回復運動を国際的な規模で展開するようになった。

例えば、オーストラリアの広大な土地は、イギリス人などのヨーロッパ人によって侵略され、一方的に国家に統合されてきた。1960年代初頭に政府がコーヴ半島イルカラの鉱山開発に与えた認可に対して、先住民アボリジニの代表は聖地保全を強調しながら土地回復を嘆願した。鉱山借地権の無効化には至らなかったものの、その運動は後に法制度の改編を促した。また、ジャビルカ鉱山の開発に対しては、必ずしも反開発ではないアボリジニは聖地保全を掲げて、世界各地の環境保護 NGO と部分的に連帯して反対運動を行ってきた<sup>1)</sup>。これに対し、1980年

### [キーワード]

ブナン、林道封鎖、疾病、近代医療、知的所有権

\* 本論文は、2003年3月30日～31日にかけて行われたバイオエコノミックス研究会（於：ホテルアヴィーナ大阪）において発表した草稿に加筆修正したものである。発表の機会を与えていただいた大阪市立大学経済学部の佐藤光先生、脇村孝平先生をはじめ大阪市立大学の諸先生方にこの場をお借りして謝意を述べさせていただきたい。

1) 鎌田真弓「『聖地の保全』をめぐる政治的対話——オーストラリア・アボリジニの鉱山開発反対運動を事例として——」『国際政治と文化研究』129号、2002年2月。

代に先住民の土地返還と権利回復を掲げて、メキシコのマヤ人によって組織されたサバティスタ国民解放軍（EZLN）は、1994年に先住民をより周縁化させることになる NAFTA（北米自由貿易協定）が発効されたのを機に、反グローバリズムを唱えて（一時的に）武装蜂起した。その後、アメリカの大学生がその運動をめぐる非公式のホームページを立ち上げた。その後、サバティスタの運動家や支持者たちは、インターネットやメーリングリストを通じて、ラカンドン密林で起きることを世界に発信するようになり、交渉や集会、デモなどの非軍事的な闘争を闘っている<sup>2)</sup>。

地球上で先住民と国家の間の紛争が頻発する中、政府や国家の枠組に囚われずに入権、環境、平和構築、開発などの分野で活動する NGO、グローバルな市民社会において構成されるアクティビズム<sup>3)</sup>、情報発信のツールとしてのインターネットなどを通じて、先住民と国家間の紛争は今日、1970年代には考えられなかつたような活動の広がりと複雑さを示している。本稿を取り上げるのは、マレーシア・サラワク州先住民ブナン（Penan）による闘争の事例である<sup>4)</sup>。ブナンは19世紀半ば以降、サラワクを治めた歴代政府の施策を通じて、森の中の移動生活から川沿いの村での定住生活へと生活スタイルの変更を余儀なくされた。彼らは、商業的な森林伐採によって生活の場として森が破壊されることに対して、1980年代後半以降に森林伐採道路封鎖（blockade、以下「林道封鎖」と記述する）<sup>5)</sup>に訴えて、政府や企業への抗議行動を行うようになった。政府からの譲歩を引き出した後林道封鎖は一時的に休止されていたものの、1990年代後半になると、疾病をめぐる環境の改善や近代医療、教育などの適切な導入を要求項目の中に掲げて再開されてきている。ブナン人の林道封鎖を中心とする活動には、NGO の関与、インターネットを通じたグローバルな市民社会との接続という特徴が顕著に見られる。

本稿の目的は、ブナン人が20世紀を通じて、歴代の政府からどのように扱われてきたのか、そして、それに対してどのように行動したのか、また、現在どのような問題に直面しているのかを記述分析して、ブナン人の闘争についての見取り図を示す中で、特に、ブナン社会における疾病と生物資源の利用および近代医療の導入をめぐる問題について考察することである。以

2) 山本純一『インターネットを武器にした〈ゲリラ〉：反グローバリズムとしてのサバティスタ運動』慶應大学出版会、2002年。

3) ワプナー（Wapner）は、今日国家に対して圧力をかけるグローバルなアクティビズムの努力は国家や世界の政治状況にとってきわめて重要であると捉えて、それを「世界市民政治（World Civil Politics）」と呼んでいる。P. Wapner, *Environmental Activism and World Civil Politics*. Albany: State University of New York Press, 1996.

4) 本稿は、平成12年度～15年度の文部科学省科研費による研究「サラワク先住諸民族社会における自然環境認識の比較研究」（研究代表者：内堀基光）の研究成果の一部である。筆者は、2001年8月と2002年の8～9月に、パラム河流域にある複数のブナン人コミュニティーにおいて現地調査を行った。

5) 林道封鎖は、林道に森から切り出した木材を横倒しにしたり、それらをバリケードとして組み立てて、交替で見張りを配置したりして、木材企業の車両が自分たちの森へと侵入するのを阻止する活動である。

下、2章ではブナン社会の概略を述べ、サラワクの歴代政府の開発を通じて「森の民」ブナン人が定住化させられるようになった経緯を記述する。3章では、開発による生活環境の変化や近代医療の導入が、ブナン人の疾病をめぐる環境をどのように変容させてきたのかについて検討する。4章では、ブナン社会における闘争の系譜を整理して、林道封鎖と疾病環境との関わりについて考察する。5章では、ブナン人への支援活動を続けるNGOとの連携を通じて、とりわけグローバル化する近代医療の展開の中で、ブナン人がどのように今日的な課題に向き合っているのかについて検討する。

## 2. サラワクの開発とブナン人

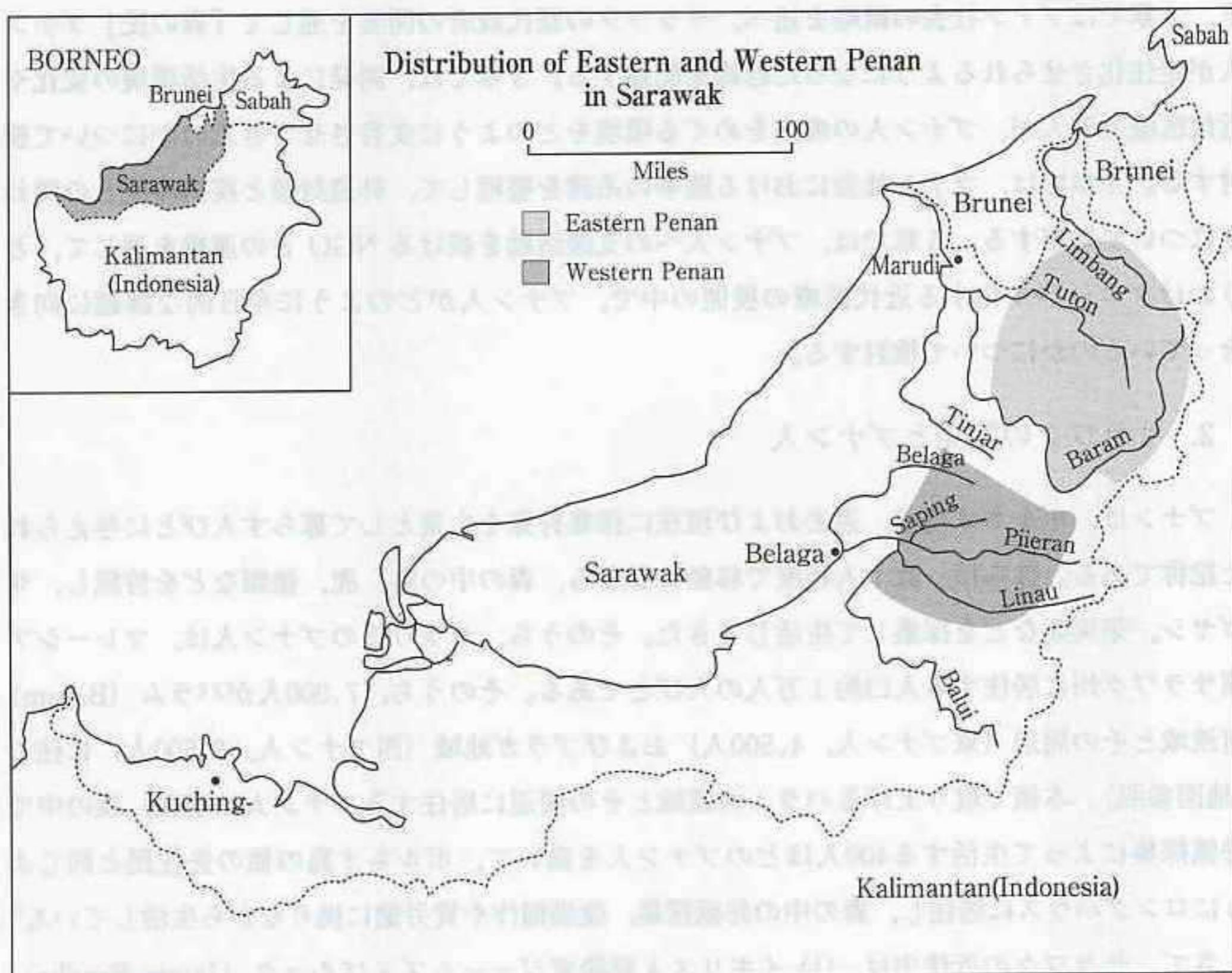
ブナンは、ボルネオ島で、過去および現在に採集狩猟を生業として暮らす人々に与えられた総称である。彼らは、数十人程度で移動しながら、森の中の猪、鹿、猿類などを狩猟し、サゴヤシ、果実類などを採集して生活してきた。そのうち、サラワクのブナン人は、マレーシア領サラワク州に居住する人口約1万人の人びとである。そのうち、7,000人がバラム（Baram）河流域とその周辺（東ブナン人、4,500人）およびプラガ地域（西ブナン人、2,500人）に住む（地図参照）。本稿で取り上げるバラム河流域とその周辺に居住するブナン人は現在、森の中で狩猟採集によって生活する400人ほどのブナン人を除いて、ボルネオ島の他の先住民と同じようにロングハウスに居住し、森の中の狩猟採集、焼畑稻作や賃労働に拠りながら生活している<sup>6)</sup>。

さて、サラワクの近代史は、(1)イギリス人冒険家ジェームズ・ブルック（James Brooke）とその子孫3代による統治の時代（1841～1941）、(2)日本軍統治時代（1941～1945）、(3)イギリス統治時代（1945～1963）、(4)マレーシア連邦時代（1963～現在）の四期に区分できる。

サラワクの開発の起源は、サラワクを統治した白人王ブルック家による統治の時代にまで遡ることができる。サラワクに横行する首狩りや海賊行為を鎮め、地域平和の確立を目指したブルック家はその目標を達成した後、1930年代に地域開発に着手し始めた。1935年にサラワクの行政官が、教育、行政サービス、開発に必要なインフラ整備に関する「青写真」を報告したが、その計画は実現されないまま終わった。

日本軍統治時代を経てサラワクは、1946年から63年にイギリスの直接統治下に置かれた。この時代にブナン人にとって重要なのは、1958年に発効された土地法である。政府は農村開発を効率的に進めるために既存の土地立法を統合した。その中で、1958年1月1日以前にその土地に住んでいたならば土地の権利を認められるという原則が建てられた。しかし、個人的な土地所有の観念のないブナンにとって、この法制定は森林に対する彼らの権利を制限することになった。その後1974年の土地法改正法の施行を含めて、サラワク州政府は州内の広大な森林を

6) P. Brosius, 'Bridging the Rubicon: Development and the Project of Future in Sarawak', in M. Leigh (ed.), *borneo 2000: Politics, History & Development*. Universiti Malaysia Sarawak, 2000, pp. 1-28.



出所：P. Brosius, 'Prior Transcripts, Divergent Paths: Resistance and Acquiescence to Logging in Sarawak', *Comparative Study in Society and History* 39 (3), p 470, 1997.

州有地とし、森林伐採のコンセッションを森林伐採企業（以下、「木材企業」と記述する）に配分する特権を得たのである<sup>7)</sup>。この間、ブルック統治後期からイギリス統治時代にかけて、サラワク政府は、森の民ブナンを保護しなければならないとする考えから、近代化させなければならないという考え方へと移行し、ブナン人の定住化を促すようになった。

サラワクの開発が本格化するのは、サラワクが木材輸出や土地に関する税を直接州の財源とすることができるという優遇措置を得てマレーシア連邦に加盟した1963年以降のことである。開発が積極的に推進された時期と同じくして、ブナン人は移動生活をする森を出て川沿いのロングハウスに定住するようになった。1950年代には7～8割のブナンがまだ森の中だけで生活していたが、1960年代になると狩猟採集のために森にいる時間が長いにもかかわらず、ほとんどのブナン人が定住するようになったのである<sup>8)</sup>。

7) E. ホン（北井一、原後雄太訳）「サラワクの先住民：消えゆく森に生きる」法政大学出版局、1989年、pp. 63-79。

8) P. Brosius, *op. cit.*, pp. 14-5.

1964年にサラワク州政府は、農村部の社会的・経済的発展を主眼とした開発計画に着手し、政府予算の32%を農村の開発にあてている<sup>9)</sup>。その頃、マレー半島では商業目的の森林伐採が盛んに行われていた。1960年から70年代半ばにかけてマレー半島の熱帯雨林の半分が伐採された。70年代後半に、マレー半島で過伐による熱帯雨林の消失に対する警告が発せられ、森林伐採の削減が実施されると、その減少分を補うために東マレーシア（ボルネオ島）のサバ・サラワク両州で森林伐採量が増加した。サラワク州の丸太生産量は、1963年の170万立方メートルから、1985年には1,220万立方メートルへと増加している<sup>10)</sup>。推定では、サラワク州は1963年から85年の間に、主に商業目的で州の全森林面積の30%にあたる282万ヘクタールを失ったとされる<sup>11)</sup>。その後木材産業は、1980年代を通じてサラワク州では石油産業について第二の外貨獲得をもたらす産業部門であり、ロイヤリティーやプレミアム、税収入などを含めて州の主要な収入源となった<sup>12)</sup>。そのような状況の中で、1980年代には、ブナン人が住むバラム河流域もまた森林伐採の対象地となつたのである。

このように、20世紀を通じて、サラワクの歴代政府は、サラワクの広大な領土を開発してきた。それらの政府は、森の中に暮らすブナン人を近代化させるために、ブナン人が森の生活を捨てて川沿いのロングハウスに定住するように促すようになった。その結果、ブナン人は、森の中で狩猟採集をして移動する生活から焼畑稲作と狩猟採集を行って定住する生活へと、ゆっくりと生活のモードを変化させたのである。

### 3. 疾病と近代医療の導入

オルドレイの1972年の報告は、森の中で移動するブナン人の疾病状況について推測するための絶好の資料である<sup>13)</sup>。オルドレイは、森の中の移動生活を放棄し、1960年代末に定住生活を始めたばかりの75人からなるブナン人コミュニティーの疾病罹患状況を調査報告している。彼らは、かつて森の中では、病気が流行った場所を放棄して別の場所へと移動しながら生活していた。オルドレイらの観察によると、彼らは定住を始めたばかりで農耕をまだ行っていなかつたようである。そのコミュニティーの人びとの食事は動物肉、果実、野菜、サゴ澱粉などバラエティーに富んでおり、栄養のバランスが取れている。頭に虱はあるものの皮膚病はない。ヨード不足による甲状腺腫、マラリアによる脾臓の腫れ、幼年期からの喫煙習慣による気管支炎などの傾向は見られるが健康状態は概ね良好である。疾病への対処は、森の生物資源に依存

9) A. J. Jayum. *Iban Politics and Economic Development: Their Patterns and Change*, 1994, Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia, pp. 190-2.

10) E. ホン, 前掲書, p. 173。

11) E. ホン, 前掲書, p. 174。

12) E. ホン, 前掲書, pp. 189-90。

13) T. Oldrey. 'Study of the Punan Busang; IV. Medical Report', *Sarawak Museum Journal* 20, pp. 270-277, 1972.

しているのだという。ブナン人たちの考えでは、定住焼畑稻作民が住む地域にはより多くの病気と死があるという。逆に言えば、森の中の生活には病気や死が少ないと、定住生活を開始したばかりのブナン人々は考えていたようである<sup>14)</sup>。

ところで、19世紀半ばにイギリスのブルック家の支配下に置かれたサラワクには、1851年に最初のイギリス人の（近代医療の）医師が派遣されている。その後1900年までにサラワクの行政の中心地に病院が建設され、地方行政の中心地には政府軍が運営する診療所が設置されるようになった。サラワク全土で平和が確立された後、1939年～50年代後半にかけて、大小河川の川沿いに居住する先住民を対象として「船（perahu）」を使って「漂流診療所（floating dispensary）」のサービスが行われるようになった。第二次大戦後にサラワクを治めたイギリス政府は、WHO（世界保健機関）の支援を受けて、先住民の不健康と貧困の原因であるとされたマラリア撲滅活動を推進している。治療活動を中心としたそれまでの医療行政に対して1952年には保健教育行政官が置かれ、公衆衛生キャンペーンが行われるようになった<sup>15)</sup>。1963年にサラワクがマレーシア連邦に加入すると、農村開発の過程で保健および社会サービスが進められるようになった<sup>16)</sup>。

1960年代半ばに開始されたサラワクの農村開発は、ブナン人を近代医療による治療により近づけることになった。ブナン人は焼畑を主生業とする定住民のロングハウスに併設されたクリニックなどを訪れて、医師などの治療と施薬を受けるようになった。その後、1978年のアルマ・アタ宣言を受けて、マレーシアでもプライマリ・ヘルス・ケア（PHC）<sup>17)</sup>に対する取り組みが行われるようになった。1980年代に入ると早速バラム河流域のブナン人のコミュニティに、共同体参加型のPHCが導入されている<sup>18)</sup>。チェンによれば、バラム河地域16のコミュニティのブナン人（総人口2,100人）に対してPHCが行われ、各コミュニティから一組の夫婦からなるヘルスプロモータが選出された。定住村に設置された開発委員会は人びと

14) 狩猟採集民は病気や飢餓にさらされて生活水準ぎりぎりの生活をしていたという仮説は近年の研究によって否定されている。狩猟採集民は、地方病レベルの疾病に悩まされることはあるとしても、集団を超えて発生する疫病に悩まされることはない。現代の狩猟採集民には、癌、肥満、糖尿病、高血圧や心臓病などの疾病がほとんどないとの報告がある。池田光穂「病気の文明史」川田順造・石毛直道（編）『地域の世界史8 生活の地域史』山川出版社、2000年、pp. 258-289。このことは、ブナンにも概ねあてはまると言っている。ブナンの定住化以前の狩猟採集生活では、食物の栄養バランスもよく、自由な時間があることから、彼らは健康状態を維持していたと予測される。

15) V. L. Porritt. *British Colonial Rule in Sarawak 1946-1963*. Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1997, pp. 345-64.

16) P. Brosius, *op. cit.*

17) WHOとUNICEFによって行われたアルマ・アタ宣言は、従来の公衆衛生に対して政治経済の安定と住民の自助努力による健康の構築を目指すPHCの理念を付加した点で重要である。この宣言を通じて、近代医療は国家や民間組織によって与えられるのではなく、地球市民であれば誰もが傍らに置いて利用すべき医療実践として位置づけられることになった。

18) P. C. Chen. 'Health Care in Sarawak's Jungles', *World Health Forum* 10, pp. 190-2, 1989.

の健康だけでなく、環境の美化、健康教育などの教育、農業生産、水の供給および排泄の設備などを担当した。ヘルスプロモータは、病気の記録、臨床経験、健康の増進と病気の予防に関してだけでなく農業生産に関しても少なくとも3ヶ月間の訓練を受けた。保健省の医師は2ヶ月ごとに各村を巡回して、ヘルスプロモータのフォローアップを行ったとされる。

その後、バラム河流域のブナン人は80年代後半になると、後述するように、ブナン人が使用してきた熱帯林における森林伐採の停止を目的として林道封鎖を行うようになった。ブナン人たちによる抗議行動を重くみた政府は、ブナン人のために生物圏保存地域や共有林を設定すべきだとする専門家の提言の代わりに、社会経済上の施策を行うことを取り決めている。政府は、1987年にブナン人のために学校、クリニック、農業訓練施設を備えたサービスセンターを備えることを構想し、ロング・クヴォック (Long Kevok)、バトゥ・ブンガン (Batu Bungan)、ロング・ジュキタン (Long Jekitan) の三ヶ所に、現在までに1800万リンギット（約5億4千万円）を投じてセンターを建設してきている<sup>19)</sup>。州政府は現在、ブナン人にサービスセンターの周辺に来て居住するように呼びかけている。しかし、ロングハウスに住んですでに2～3世代を経た現在、ブナンは定住したそれぞれの土地からサービスセンター近くへと移住することを好まない。さらに、バラム河の支流域に沿ってかなり広い範囲に散住するブナン人にとって、船にせよ、木材企業が所有するランドクルーザーに便乗するにせよ、サービスセンターへのアクセスは至難である。その結果、政府による近代医療のサービスは、三つの村とその周辺に住むブナンだけに限定されてしまったのである。

ところで、他の東南アジアの多くの少数民族と同様に<sup>20)</sup>、ブナン人にとっての薬は、食事や化粧などの生活領域と切り離すことはできない。ブナン人は近代医療の治療実践が導入される以前から、病気を患った場合には森の動植物を食べたり、それらからの抽出物を患部に塗ったりして対処してきたのである。ある植物は、矢毒の解毒用だけでなく、その茎は噛むと腹痛と消化の薬となる。葉は火の上にかざすと蚊と蜂よけになる。樹液は、頭に塗ると頭痛を鎮める働きがある<sup>21)</sup>。ところが、森林が商業目的で伐採された結果、以前は薬用としていた生物資源をブナン人が手に入れにくくなっている。バラム河流域のブナン人の居住地では、多発する皮膚感染症などに対して処方されるべき生薬が手に入らないため皮膚病者が多いとの報告がある<sup>22)</sup>。また、母乳が出ないため薬草を処方しようと思ったが薬草は木材企業によって森が破壊されたために手に入らない、皮膚感染を取り除くために洗剤を赤ん坊にこすりつける

19) サラワクの森林政策とブナン社会に対する公共サービスについては以下の文献を参照のこと。金沢謙太郎「生物多様性消失のポリティカル・エコロジー——サラワク、バラム河流域のブナン集落における比較調査から」『エコソフィア』7号、pp. 87-103。

20) V. King, *Anthropology and Development in South-East Asia: Theory and Practice*. Singapore: Oxford University Press, 1999, p. 231.

21) W. Davis, *Nomads of the Dawn: The Penan of the Borneo Rainforest*. Pomegranate, 1995.

22) *Utusan Konsumer* 'Baram's Penan Community—Hungry, Poor and Sick', May 2002, p. 11.

母親がいるといった報告は後を絶たない<sup>23)</sup>。

ここで見たように、ブナン人は定住する以前には、森の中で主に生物資源に依存して疾病に対処してきた。19世紀後半にサラワクに近代医療が導入されると、その後ブナン人が近代医療に接する機会は徐々に増えた。ところが、1980年代にブナン人の居住域にも商業伐採が広がり、ブナン人による政府や企業への抗議行動を通じて、政府の拙速な近代医療の配置（サービスセンターの建設）を促すことになった。また、森林伐採によりブナンの居住地周辺の自然環境が悪化し、森の生物資源の利用が限定されたことに加えて、近代医療が十分に届けられていない結果として、ブナンの健康状態は悪化する傾向にある。

このように、ブナン人の疾病環境の悪化が顕著になったのは1980年代のことである。その時期は、ブナン社会で頻繁に林道封鎖が行われた時期でもあった。だとすれば次に、林道封鎖とは何であったのかを検討して、ブナン人の疾病をめぐる環境について追究してみる必要がある。

#### 4. 抗議行動としての林道封鎖

サラワク州において商業目的で森林が盛んに伐採された頃、不法にサラワク州内に滞在したスイス人ブルーノ・マンサー（Bruno Manser）は、1984年から90年までの間、森で生活するブナン人のもとで言語や習慣を学びながら過ごした。それは、ブナン人が木材企業の森への侵入と破壊に対して不満を募らせ、80年代後半に林道封鎖を頻繁に組織した時期に重なる<sup>24)</sup>。1987年3月の開始後に他地域にも派生した初期の林道封鎖の目的は、商業的な森林伐採に抗して生活の場としての森を守ることであった。ブルーノはそのような場面でブナン人の相談相手となっただけではなく、自らのネットワークを活用して欧米のメディアを森へと招き入れ、林道封鎖に至る事情を世界に向けて発信し、ブナン人の生活の侵害を国際的な関心事へと仕立てるのに重要な役割を担った。また、バラム河中流域の郡長事務所所在地、マルディ（Marudi）に事務所を構えたNGO、SAM（Sahabat Alam Malaysia、地球の友マレーシア）は、その本拠地があるペナン島にあるINSAN（Institute of Social Analysis）やWorld Rainforest Movementなどの他のNGOと連携しながら、森林伐採によって影響を被るブナン社会への支援を行った。これらのマレーシアのNGOは第一に、サラワクの文化的・生物学的多様性の保全、第二に、国内に存続する社会的な不平等に抗して活動を組織したのである<sup>25)</sup>。

23) *Utusan Konsumer op. cit.*, pp. 12-3.

24) ケックとシッキンクによれば、1980年代の後半にサラワクで先住民と国家の間の紛争が広がった背景には、(1) 森林伐採権をめぐる政治腐敗が明るみに出たこと、(2) 1987年に、ITTO（International Tropical Timber Organization）の会議と並行して、JATAN（Japan Tropical Forest Action Network）と地球の友が、熱帯材の輸入に関する会議を行ったこと、(3) ブルーノ・マンサーなどがブナンの林道封鎖を国際的関心にまで高めたことがあった。M. E. Keck and K. Sikkink. *Activists beyond Borders: Advocacy Networks in International Politics*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1998, pp. 152-4.

サラワク州政府は、国内治安法（Internal Security Act）に基づいて、1987年以降林道封鎖を行ったブナン人を次々に逮捕、拘留していった<sup>26)</sup>。サラワク州首席大臣はブルーノを「国家の敵」と名指しし、彼を捕縛するために警察を派遣した。二度の逮捕から逃れたブルーノは、ブナン人たちと活動して州政府の標的となるより海外で活動する方が有効であると考えて1990年にスイスに帰国し、そこを拠点として活動するようになった<sup>27)</sup>。他方、SAMはブナン人の林道封鎖に対して積極的に支援を行い、1987年6月にブナン人の代表がブナン人の窮状をクアラルンプールの連邦政府代表者と話し合うための手配をした<sup>28)</sup>。

このような林道封鎖活動の初期段階において、必ずしも反開発ではないという、後のブナン社会の闘争を方向づけるような出来事が起きている。それは、イギリス在住の10歳の少年によって書かれた手紙に対するマレーシア連邦首相マハティールの返書である<sup>29)</sup>。動物に興味がある少年は、金儲けのために熱帯雨林を伐採し続けると動物が死んでしまうのは恥すべきことだという内容の手紙をマハティールに送った。これに対して、マハティールは1987年8月15日付の手紙の中で、「大人たちが、私たちの森林から木材伐採のことを取り上げて私たちを侮辱しようとする目的で君を利用したことは恥ずかしいことです」と切り返した上で、「木材伐採は何十万もの貧しいマレーシア人を助けています。君が熱帯の動物のことを勉強したがっているから、彼らは貧しいままでいなければならないのか。貧しい人たちの空腹を満たすより、君の勉強のほうが大切ですか」という問い合わせを投げ返した。このマハティールの強いメッセージに対して、少年だけでなく欧米の市民団体もまた応答することができなかつたようである<sup>30)</sup>。マハティールの環境保全主義への反論を踏まえて、マレーシアのNGOはその後先進国の政府および市民団体は、発展途上国が自律的に開発することを妨げないように環境問題に取り組むべきだとする立場を鮮明に打ち出すようになった<sup>31)</sup>。その後ブナン人たちもマレーシアのNGOに歩み寄りながら、一貫して「必ずしも反開発ではない」という立場を取っているが、政府はNGOと連携するブナン人の行動に対して警戒と非難の態度を隠すことはない。

25) F. Majid Cooke. *The Challenge of Sustainable Forests: Forest Resource Policy in Malaysia, 1970-1995*, Australia: Allen & Unwin, 1999, pp. 148-50.

26) 1989年には、林道封鎖の広域的な展開において、それまで最大規模の113人（ブナン人を含む先住民）が逮捕された。

27) 彼は、自ら設立したNGO、BMF（後述）の活動を通じて、スイスの約3分の1の自治体に熱帯材の輸入を認めない決議をさせるのに成功している。

28) サラワク先住民カヤン人出身のSAM代表、ハリソン・ンガウ（Harrison Ngau）は、先住民の人権擁護と森林伐採反対を掲げて1990年10月に連邦議会議員に当選したが、NGOは今日に至るまで、ブナンの抗議運動を扇動する団体としてサラワク州政府によって敵対視されてきている。

29) 竹内直一編『熱帯雨林とサラワク先住民』明石書店, 1993, pp. 159-62.

30) 内堀基光『熱帯林の消失と先住民社会』, 如水会, 1997, pp. 13-15。

31) M. E. Keck and K. Sikkink. *Activists beyond Borders: Advocacy Networks in International Politics*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1998, pp. 157.

前章で見たように、バラム河流域のプナン人の抗議行動により近代医療が急速に配置されたため、全体として見れば、プナン社会には近代医療の導入が制限されることになった。プナン人が政府や企業に対して林道封鎖を組織して、行政との対話と交渉を、熱帯雨林をめぐる権利の問題へと限定してきたために、近代医療の導入が遅れ、プナン人は現在皮膚感染症などの疾患に苦悩するようになったのである。言い換えると、プナン人の居住域への近代医療の導入の遅れは、部分的にプナン人たちによる林道封鎖に起因する。

その後、NGO が推進した環境問題への国際的な関心の高まりを背景として、マレーシア連邦政府は1989年末に木材輸出の全面禁止を公表した。ところが、サラワク・サバ両州政府がその決定に強く反対したため、それは最終的には見送られることになった。翌1990年になると、頻発する林道封鎖とそれに対するグローバルな市民社会の支持に配慮して、今度はサラワク州政府が、プナン人が抱える問題を解決することを目的として委員会を組織した。その結果として、プナン人々は林道封鎖を行うことを手控えるようになったのである。ところが、プナン人を支援するとした州政府の約束が履行されないことに苛立ったプナン人々は、1996年に休止していた林道封鎖を再開した<sup>32)</sup>。その点で、再開後の林道封鎖は初期のそれとは方向づけが異なる。林道封鎖活動再開後には、プナン社会を支援する NGO との緊密な連携のもとに、森林伐採に全面的に反対するのではなく、住民に影響を与えない場所での適正規模の森林伐採とそれに対する見返り、住環境、医療環境、教育などの迅速な割り当ての要求を掲げて、プナン社会は林道封鎖を行うようになったのである。2002年には、複数のプナンのコミュニティーによって、ほぼ同時に8ヶ所で組織的に林道封鎖が行われた<sup>33)</sup>。

プナン人々は今日、様々な NGO との連携と協力を図りながら、林道封鎖を行っている。NGO は、林道封鎖を含むプナン人の抗議行動に対しても様々な支援をしたのであろうか、また NGO は、とりわけ近代医療との関わりにおいて、今日のプナン社会に対してどのような影響を及ぼしているのだろうか。次に検討するのはこの点である。

32) 1996年8月8日に、「共同体は生活向上や利益をもたらす開発などの手助けや援助をするなどと約束してきたサラワク州政府や伐採業者が、約束を決して守らないことにあきれている」として、林道封鎖を組織した。『サラワク・アップデート』28号、p. 5、1997。その前年の1995年11月1日にも、プナンが森林伐採に異議を唱えている地域での伐採を中止させるために林道封鎖を行ったという報告がある。『サラワク・アップデート』26号、p. 4、1996。

33) 2000年5月にインドネシアとの国境からマレーシア領サラワクに潜入したブルーノはその後、標高2000メートルの険しい石灰岩峰に単独で登頂すると言って、プナンの友人と別れた後に消息を絶った。その後、関係者による懸命の捜索にもかかわらず、今までブルーノの行方は知れない。BMFは、彼が消息を絶ってから一年後に、ブルーノが死んだ可能性が高いと公表した。彼の「死」は、ブルーノの名とともに記憶される、プナン人の林道封鎖による闘争の第一幕の幕引きを意味している。同時に、プナンを取り巻く社会変化を背景として、闘争の第二幕の幕開けを示している。

## 5. NGO と知的所有権

サラワクのブナン人によって自助目的で組織された団体、「サラワク・ブナン協会 (Persatuan Penan Sarawak)」は2002年6月9日に、バラム河中流域のブナン人の定住村ロング・サヤン (Long Sayan) で「ロング・サヤン宣言 (Long Sayan Declaration)」を公表した。その宣言には、ブナン人が経験している健康問題の現状が述べられている。商業伐採によって汚れた河川と空気がブナン人に腹痛、皮膚病、眼病を引き起こし、人びとの免疫力を弱めた。また、森で生活するブナン人の間では食糧が不足がちであり、企業が流す汚染された水を飲んで幼児が死亡した。さらに、薬用に供されていた生物資源が開発によって破壊されてきたことが述べられている。そのような事情を踏まえて、政府に対してブナンのコミュニティーに PHC を導入するように求めている。さらに、サービスセンターや町の病院には行くのは至難であるため、移動診療所などを通じてブナン人の健康維持に努めてほしい、病気予防のための PHC 教育を実施してほしいという要望が述べられている<sup>34)</sup>。

このようなブナン人の窮状を理解し、様々な局面においてブナン社会を支援する NGO は、二種類に分類することができる。第一に、ブナン人の自助組織を支援し、政府や企業に対するブナン人の要求実現に向けて重要な役割を担う地元の NGO がある。1980年代末以降、ブナン人の権利回復運動に積極的に支援を行ってきた SAM や1990年代末に始動した BRIMAS (Borneo Resource Institute) などがその代表格である。マルディに事務所を構える SAM は、様々な機会にマルディを訪れるブナン人たちと日常的に連絡を取り合っている。SAM はまた、ブナン人と共同で政府に提出する資料づくりのための土地調査を行い、ブナン社会に情報を提供して林道封鎖を支援し、ホームページを通じてブナン社会が直面する問題を世界に向けて発信している。

第二に、通常は地元でブナン人たちとともに活動をするのではなく、海外のそれぞれの拠点から、ブナン社会が置かれている窮状とその解決への模索を市民社会に対して広く発信し、講演会やフェアトレードを行って<sup>35)</sup>、ブナンを側面的にサポートするグローバルな市民社会のアクティビズムを構成する団体がある。それらは、スイスに拠点を置く BMF (Bruno-Manser-Fonds), 1991年に設立されたアメリカの Borneo Project, 1980年代末から活動を行っている日本のサラワク・キャンペーン委員会 (Sarawak Campaign Committee) などである<sup>36)</sup>。さらに、

34) Sarawak Penan Association. *Long Sayan Declaration*, 2002.

35) 例えば、Borneo Project やサラワク・キャンペーン委員会、BMF などは、ブナン人や他のサラワクの先住民が編んだ籠などの工芸品を一般向けに販売して、NGO の活動資金にしたり、売り上げを先住民に還元したり、先住民の工芸品の伝承と発展を奨励する活動を行っている。

36) これらの NGO の成立は、欧米や日本における自然環境破壊に対する市民運動の展開に連動している。これらの団体は、市民に対する啓蒙活動を行うとともに、熱帯材のボイコット運動にも関わってきた。そのような活動が、ブーメラン効果的にサラワク州政府の木材輸出とそれをめぐる政策に影ノ

ブナン語で「サラワク・ニュース」という意味の Rengah Sarawak は、サラワクの人びとが直面する問題をウェブ上で発信するインターネット・コミュニティーである<sup>37)</sup>。

このような NGO は今日、ブナン人を取り巻く社会環境の変化に速早く対応しようと努めている。それは、1992年に採択された生物多様性条約 (Convention on Biological Diversity)<sup>38)</sup> 以降の新たな危機への対応に色濃く現れている。

コンピュータによる化合物デザインが行われる現在でも、生物資源からの創薬はいまだに製薬の7割を占め、生物資源の中から新薬を生み出そうとする活動は今後ますます活発になることが予想される<sup>39)</sup>。サラワク州政府は、1997年に「サラワク生物多様性センター条例 (Sarawak Biodiversity Centre Ordinance)」を制定し、翌年から発効させた。サラワク生物多様性センター（以下、「SBC」と記述する）は、「薬学的、医学的および他の特別な目的のための生物資源の利用に関わる科学調査および実験のための政策とガイドライン」（条例第5項）の作成を担当し、バイオパイラシー (biopiracy)<sup>40)</sup> の監視を行う。現在、サラワクにおける最初のプロジェクトの一つとして、血液中の HIV ウィルスの量を減じる働きがあるとされる樹木ビンタンゴール (Bintangor: *Calophyllum lanigerum*) から抽出された化学物質カラノライド A (Calanolide A) のエイズ治療薬（抗結核薬）としての商品化を目指されている。アメリカのメディシェム・リサーチ社 (Medichem Research) とサラワク州政府の合弁企業サラワク・メディシェム社 (Sarawak Medichem) は、1987年にすでにカラノライドAの特許を取得している。

ところが、SBC の構想には、利益配分の面でブナン人などの先住民の「知的所有権 (intellectual property rights)」<sup>41)</sup> に対する配慮がなされていないという問題がある<sup>42)</sup>。現状では条

々響を与えるようになったのである。M. E. Keck and K. Sikkink, *op. cit.*, p. 157.

37) <http://www.rengah.c2o.org/>

38) 一般に、開発は自然環境を破壊してきた。その結果、人類によってまだ生態が解明されていない生物種500万～3000万種のうち、毎日少なくとも50種が地球上から姿を消しているとされる。そのような認識を基礎として、1970年代に生物多様性の保全、とりわけ生息地である発展途上国のインセンティブに基づく保全の必要性が唱えられるようになった。1978年に「国連環境計画 (UNEP)」は、専門家会議を設置する旨を決定している。1990年以降に、生物多様性保全のための国際条約を締結する目的で政府間の条約交渉が行われ、1992年に生物多様性条約が採択されている。それは、翌1993年に発効された。山名美加「知的財産権と先住民の知識：遺伝資源・伝統的知識における『財産的情報』をめぐる考察」『現代思想』30-11, pp. 152-164, 2002。

39) 山名美加 *op. cit.*

40) 生物資源の海賊行為のこと。詳しくは、以下の文献を参照のこと。V. シバ（松本丈二訳）『バイオパイラシー：グローバル化による生命と文化の略奪』緑風出版, 2002年。

41) 知的所有権をめぐる近年の動向については、以下の論文を参照のこと。佐藤隆広「WTO の貿易関連知的所有権 (TRIPS) 協定と南北問題」『経済学雑誌』103巻3号, pp. 17-59。池田光穂「民族医療の領有について」『民族学研究』67巻3号, pp. 309-27。

42) F. J. Chung, 'Interests and Politics of the State of Sarawak, Malaysia Regarding Intellectual

例に従って、SBC からやって来る専門家に対して見返り（の約束）なしに、ブナン人は、森の生物資源に関する知識・情報を提供するという役割を期待されている<sup>43)</sup>。バイオプロスペクターや製薬企業は、何百万種と言われる植物種の中から生物化合物の発見を確かなものにするために、とりわけ、ブナン人のような森に深く依存してきた人びとの知識や情報に頼ろうとするからである。

18世紀半ば頃からヨーロッパ人はサラワクを訪れ、サラワクの森を探検し、熱帯雨林を生物学・植物学的な資料と資源の宝庫であるとヨーロッパに向けて報告した。そのことは、ヨーロッパ人の学術的・投機的な関心を煽ることになった。サラワクの森は、学術探検家や旅行者、行政官などを招来したのである。ところが、実際のところ、サラワクの森はヨーロッパ人が単独で足を踏み入れることができるように逍遙可能な空間などではなかった。荒ぶるサラワクの森では、ヨーロッパ人探検家や行政官は、現地の人びとの案内がなければ活動することができなかつたのである。このことは現代においても全く変わりがない<sup>44)</sup>。

サラワク・メディシェム社の試みは、生物多様性から利益を上げるビジネスの革新的なモデルになることが期待されているが<sup>45)</sup>、新薬製造販売による利益は、森を案内して情報と知識を提供する先住民の知的所有権に還元されるのではなく、すべて政府と企業に落ちてゆくように仕組まれている。生物多様性条約以降、ブナン人はサラワクの他の先住民とともに、生物資源をめぐる知識および資源の提供者として構成されることを通じて、現在新たな危機に直面しているのだと言える<sup>46)</sup>。

このような危機に対して、NGO は、ブナン人に今起こりつつある現状に関する情報や法律知識を提供することを通じて、ブナン人が自らの権利などに対して自覚的になるよう緩やかに指導を行ってきていた。その一環として、知的所有権に関しても支援と教育を行っている。地元の NGO である SAM や BRIMAS は、バラム河流域のブナン人のコミュニティーに小冊子を配布するとともに、不定期に小セミナーを開催している。例えば、BRIMAS が配布する

43) 'Property Rights for Plant Derived Drugs', *Journal of Ethnopharmacology* 51, pp. 201-204, 1996.

44) さらに、生物資源を使用する場合は、何人も使用料を支払わねばならないという州法に従えば（侵犯した場合には罰金か懲役を科せられる）、ブナン人を含むサラワクの先住民はこれまで使用してきた生物資源を自由に使うことができないことにもなる。S. Sim and N. Toyoda. <http://www.earthisland.org/borneo/news/wires/01win07.html> 2001

45) E. Hansen. *Stranger in the Forest: On Foot across Borneo*. Methuen, 1988.

46) Far Eastern Economic Review (Jun 14). 'From the Jungle to Clinic', 2001.

47) 知的所有権をめぐる法制度を利用するには、法専門家によるアドバイスを得られる富と権力を持った一部の人間である。それは、世界中どこでも通用する「知識」「文化」「伝統」などの概念定義を要求し、規定する。知的所有権をめぐる法制度は、知識と技能に関して独自の方法を持つという先住民社会の特徴とは齟齬をきたすことになる。富と権力に圧倒的な不均衡がある中で、法改正などの闘争とともに、先住民の知の伝統に対する認知と伝達に向けた対話を推進することが大切であると説く、以下のテッサ・モーリス＝鈴木の論考は示唆に富んでいる。テッサ・モーリス＝鈴木「知的所有権と先住民の権利」「みすず」493, 2-11, 2002年4月。

小冊子には、「共同体の歴史に対して意識的であること」「土地利用について調査をし、紛争について記録することや証拠を残すこと」「警察への報告が重要であること」などの法的な基礎知識が説かれている<sup>47)</sup>。また、アメリカに拠点を置く NGO, Borneo Project は1998年以來、薬用および伝統的に用いられてきた生物資源を保護し、それらをめぐる知識を伝承するために、モデル村としてロング・サヤン村に資金を供与してきている。このような NGO 主導のプロジェクトを通じて、ブナン入たちは、自らの権利全般だけでなく知的所有権に関する認識を持つようになってきている。

NGO の危惧は、知識教育や情報伝達を含めてブナン人をサポートしなければ、ブナン人がグローバルな近代医療の発展のために利用される知識と資源の窓口として、一方的に近代医療に奉仕する役割を担わされてしまうことにあるのではないだろうか。このことは、ブナン社会に近代医療の導入が限定されている現状を考え合わせる時、近代医療をめぐってブナン社会には根深い問題が存在することを気づかせてくれる。ブナン社会は、生物多様性条約以降の新薬開発の文脈で、グローバル化する近代医療によって一方的に従属的な位置に置かれる可能性がある。

ところで、2002年8月のある日の夜遅く、筆者が滞在していたブナン人の村に木材企業のランドクルーザーが到着した。マルディの郡長事務所の指令で、村長であり、サラワク・ブナン協会代表でもあるブナン人の男性を呼びに来たのである。2002年3月末から1ヶ月間に相次いでバラム河流域の5ヶ所でブナン人が集中的に林道封鎖を続けた状況を重く見た州政府計画局(State Planning Unit)が、ブナン社会に広がる問題や開発計画についてヒアリングを行うことを目的として、ブナン社会のリーダーたちを召集したのである。翌日にミリ(Miri)市で行われたヒアリングの場では、ブナン人の林道封鎖に影響を与えたとされる地元および国際社会の NGO の役割が政府から問題視された。ブナンのリーダーたちは、ブナンはブルーノに影響されていないし、ブルーノもブナンに影響を与えようとする意図をもっていなかったと述べた。この点に、ブナン社会と NGO との分断を図る州政府の狙いを読み取ることができよう。また、ブナンのリーダーたちは、自分たちは決して反開発ではなく、開発の利益がどのように共同体に向けられるのかが肝要なことであり、ブナン社会にとって適切な開発とはどのようなものであるのかについて調査した上で、政府が開発を進めてくれることを望むと述べた<sup>48)</sup>。

ブナン入たちは今後、このような州政府から提示される対話と交渉を重く見て、政府と企業の側に歩み寄りながら、近代医療や教育などを含む地域開発を推進してゆこうとしているのだろうか<sup>49)</sup>。そうすることは、ブナン入たちの今日における最も強い希望であるが、政府・企業

47) BRIMAS, n.d..

48) *Utusan Konsumen 'Penan Representatives Meet Sarawak State Planning Unit'*, September 2002.

49) バラム河支流のアポー川沿いに近接するブナン人の定住村ロング・トゥジャン (Long Tujang) とロング・ブアン (Long Buang) では、政府の地域開発のあり方をめぐる見解が異なる。後者は、

はこれまでブナン人の要望を全て受け入れてくれたわけではないし、これからも受け入れてくれるとは限らない。その意味で、ブナン人の近くで彼らの窮状に接して、ブナン社会が不利益を被ることがないように、林道封鎖を支援し、諸権利や知的所有権などの知識や情報を先行的に与えてくれる NGO はブナン人にとって強い味方なのである。ブナンの人たちは今、NGO との緊密な連携と政府や企業との対話と交渉の間に揺れ動きながら、闘争の新たな局面に入りつつあるのだと言える。そして、そのことが、ブナン人の疾病と近代医療をめぐる環境をどのように変えてゆくのかについては、今後の展開を見守らなければならない。

## 6. おわりに

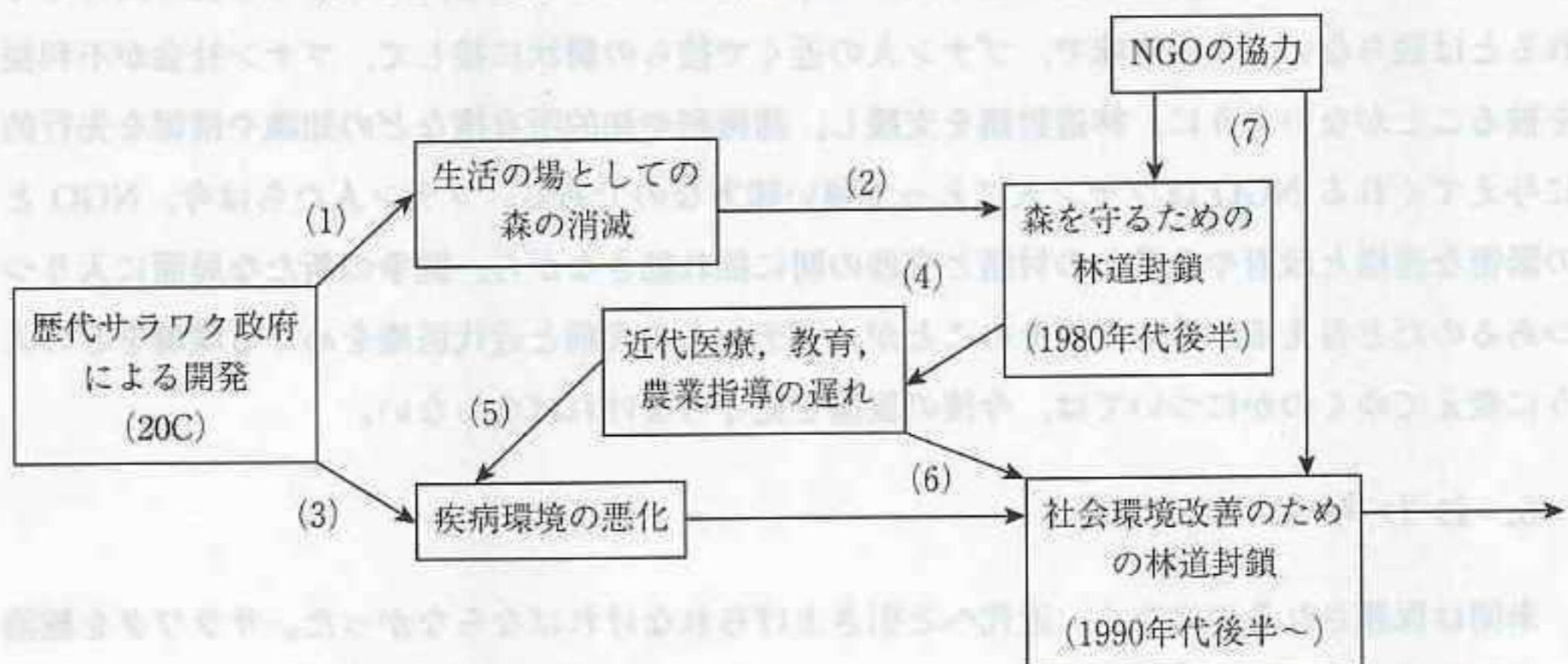
未開は保護されるのはなく、近代へと引き上げられなければならなかった。サラワクを統治した歴代政府は、20世紀を通じて、ブナン人を川沿いのロングハウスに定住させた。他方で、サラワクの熱帯雨林の自然に魅了されたヨーロッパの探検家、旅行者、行政官たちは、自らの冒険心と学術的好奇心を満たすために、森の案内人として先住民ブナン人を必要とした。ブナン人はこれまで、ヨーロッパの都合によって一方的に移動させられ、協力させられてきたのである。

サラワクのマレーシア連邦加入後の商業的な森林伐採の拡大によって、このままでは自分たちの生活の場が破壊されることに危機感を抱いたブナン人は（図中の（1））、1980年代後半になると、商業的な森林伐採を阻止するために林道封鎖を開始した（図中の（2））。それ以降、林道封鎖が、現在まで続くブナン人の主要な闘争のツールとなったのである。他方で、商業的な森林伐採は自然環境を破壊し、生物資源を減少させてきた。その結果、ブナンの疾病をめぐる環境を悪化させることになった（図中の（3））。森を守るための林道封鎖は、森林伐採量を制限することにより、その目的を部分的に達成したのだと言える。ところが、その林道封鎖による政府と企業への抗議行動を通じて、逆説的に、近代医療、教育、農業指導、その他「近代」のブナン社会への導入が制限されることになった（図中の（4））。近代医療の遅れはまた、疾病環境を悪化させたのである（図中の（5））。疾病環境や近代医療などの社会環境の改善を要求項目に掲げて、ブナンの人たちは1990年代後半以降に林道封鎖を盛んに行ってきている（図中の（6））。

これに対し、NGO は、ブナン人の窮状を理解し、1980年代後半からブナン社会への支援活動を行ってきた。NGO は今日、林道封鎖に至った経緯を含めて、ブナン社会の窮状をインターネット上で世界に発信する役割を担っている。NGO は、グローバルな市民社会のネット

＊前者の村に油ヤシのプランテーションを建設する見返りとして学校や診療所を設置するという政府の提言を受けて、前者の村を移住した人たちが住む村である。前者は、森林を皆伐する油ヤシのプランテーションを推進する政府に反対する一方で、後者は、政府の開発方針に賛同している。このように、ブナン社会のサラワク州政府の開発施策に対する態度は、必ずしも一枚岩ではない。

図 プナン社会における疾病、林道封鎖、NGOをめぐる概念図



ワークの中で、政府や企業のプナン社会に対する対応に監視を強めて、プナン社会が再周縁化されてしまうことがないように意を払い続けている。プナン人の知的所有権などをめぐる知識の向上を目指して行われる教育や支援の活動はその一端である（図中の（7））。

プナン人は現在、森林伐採や自然環境破壊に抗するというのではなく、日常生活の中で感じられる政府や企業の不当な処遇に抗して、林道封鎖を行っている。木材企業が契約外の森で伐採をした、家族を埋葬した土地が木材企業のブルドーザーによって破壊された、木材企業が所有するランドクルーザーが林道で車待ちをしているプナン人を度々無視して走り去った、森林伐採の見返りとして企業が供与を約束したチェーンソーや屋根材が期日を過ぎても全く届けられないことがない……など、政府や企業がプナン人に対して誠意を示さなくなつたと感じられた場合に、プナン人は林道封鎖を行うことがあると言う。また、森林伐採による自然環境の悪化と健康への被害、それに代わる移動診療所などの設置を訴えて、プナン人は同じ時期に異なる場所で林道封鎖を組織する。

本稿で見たように、森の中の移動生活から定住生活への生活モードの変化、商業的な森林伐採による自然環境の破壊と生物資源の減少、林道封鎖による近代医療の導入の遅れなどが、プナン社会の現在の疾病をめぐる環境を方向づけてきた。その意味で、疾病とそれへの対処は、決して個人的なものではなく、社会的・歴史的・環境的条件によって規定されるものだと言える。近代化の過程で森の生活を捨てて定住させられたプナン人は今日、それらの諸条件の改善を含めて、近代国家の枠組で生き続けるために闘争を闘っている。